

浄土

monthly
JODO

Feb. Mar. 2000

2.3
月
合併号



法然上人鑽仰会



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ

日本テレコム

お申し込み、お問い合わせは ☎ **0088-82** (無料)
お客様センターへどうぞ

〔受付時間〕9:00～23:00 (年中無休)

＜インターネットホームページ＞ <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

浄土

2000/2・3月号 目次

彼岸の菩提心	勝崎裕彦	2
懐しき玩具	芝崎慶三	8
目次		9
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	10
仏教歳時記	葦名一光	17
御法語に聞く	小村正孝	18
列伝 椎尾辨匡上人	真野龍海	22
Jフォーラム		27
誌上句会	選者＝増田河郎子	28
まちがいさがし	藤井ひろし	31
編集後記		32

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 脱下
表紙撮影＝芝崎慶三
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



彼岸の 菩提心

大正大学助教授

勝崎裕彦

清らかなやすらぎに満ちた悟りの世界に対して、いろいろな苦しみや悩み、さまざまな思いや煩悩に満ちた迷いの世界がある。私たちの生きている世界つまり迷いの生存をこちら側の岸、此岸とすれば、あちら側の岸、彼岸とはすなわち悟りの世界である。迷いの此岸から悟りの彼岸に到ることを到彼岸といい、サンスクリット語のパーラミター(波羅蜜・波羅蜜多)の訳語で、仏道実修の最終目標である。

波羅蜜行とは、悟りの彼岸に到る修行のあり方、悟りの彼岸へ渡る実践行を示したもので、大乘菩薩の菩薩行の基本的な要件である。菩提心つまり悟りを求める心を発^はこした菩薩は、菩薩行に挺身し、菩薩道を邁進するのであるが、その代表的な実践徳目が六波羅蜜の教えというわけである。

いうまでもなく六波羅蜜とは、①布施(めぐみほどこすこと)②持戒(いましめまもること)③忍辱(たえしのぶこと)④精進(つとめはげむこと)⑤禪定(しずめたもつこと)⑥般若(智慧、さとりめぎめること)の六つの徳行・善行である。菩提心を発^はこして到彼岸を目指す菩薩の大切な実践行ということで、お彼岸の中日はさんでの六日間、仏の悟りの世界をはるかに求めながら、精進努力することが肝要となるわけである。

ところで、こうした六波羅蜜の実践行ができないとしたならば、どうであろうか。經典では、六波羅蜜の反対概念として六蔽^{ろくへい}という六つの悪心を教えている。六蔽心、つまり清らかな心を覆い隠してしまう六つの邪悪な心とは、①慳貪(おしみむさぼること)②破戒

(いましめをやぶること) ③瞋恚(いかりうらむこと) ④懈怠(なまけおこたること) ⑤散乱(ちりみだれること) ⑥愚痴(おろかにまようこと) の六項目であり、六波羅蜜の徳目とまったく対応しているのである。

六蔽心におちいることなく、よくさえぎり、用心怠りなく、六波羅蜜行へ向けて十二分に努力しなくてはならない。お彼岸は仏心をはぐくむ大切な時節であり、大乘菩薩の教えにならって六波羅蜜を実践し、彼岸の菩提心をあらためて発こしたい。

春のお彼岸時分の風情を、秀句・佳句によりながら綴ってみたい。寒さがときほぐれて、やがて本格的な陽春を迎える季節の移り変わり目であり、春分の中日は時節時候の大きな節目・区切り目である。彼岸の入りからお中日、そして彼岸の明けまでの一週間、いやそれだけでなく、彼岸前や彼岸過ぎも範囲に入れて、少しばかり鑑賞し、春のお彼岸の居住まい、身住まい、心模様などをたずねてみたいのである。

お彼岸にまつわる季語は多いが、俳諧歳時記では、〈時候〉の項に「彼岸」を入れ、〈行事〉の項に「彼岸会」を取るという具合で、時節時候の側面と行事習俗の側面とのいわば二本立てで数多の季語を提供しているわけである。試みに、お彼岸時分の日柄を順に追って、主な季語を列記してみよう。彼岸前・彼岸太郎・彼岸入り・入り彼岸・さき彼岸・初手彼岸・彼岸参・彼岸詣・彼岸道・彼岸講・彼岸寺・彼岸会・讀仏会・万燈日・お中日・彼岸団子・彼岸餅・彼岸明け・終い彼岸・彼岸ばらい・彼岸舟・彼岸過ぎ——このほかに

彼岸晴れとか彼岸桜などを加えてもよいわけである。

以下、新暦に入つての近代・現代の秀句を辿りながら、私なりの感想を付してみたい。

大風の三日荒れとほす彼岸前 水原秋櫻子

冒頭に大風とはいささか出し抜け気味であるが、彼岸前の荒れ模様の気候はよくあることとしたものである。実は、おだやかな春の彼岸の一週間を予測し、またそうした日柄を心から待望する願いを込めて、この秋櫻子の一句があり、私もそうした思いを込めて、最初に取り上げたのである。

毎年よ彼岸の入に寒いのは 正岡子規

「母の詞ことば自ら句となりて」と前書がある有名な句である。明治二十六年三月の作で、子規数え年二十七歳の時の一句である。お彼岸の入りの日の冷えこみに、母子が交わした会話の中から生まれたものである。私は、子規のお母さんは当時いくつくらいであつたろうかなどと思案してしまうが、ここでは彼岸入りのちよいとした寒さを用意しておきたい。

近山に彼岸の雪のふりにけり 石原舟月

山国に雪の彼岸の一会かな 金田あさ子

北から南へと長い日本列島であるから、春のお彼岸の温和な頃といつても、まだ雪の残るところも、雪の降るところもある。「彼岸荒れ」「彼岸ざらく」「彼岸の糊雪のりゆき」などの言い方もあり、「彼岸過ぎまで七雪ななゆき」「彼岸過ぎても七はだれ」などの俗諺の伝わる地方もあるわけである。

手に持ちて線香売りぬ彼岸道 高浜虚子

他宗とて敬して過ぎぬ彼岸寺 景山筍吉

読経に障子明るし彼岸寺 魚住王蟬

いよいよお彼岸の寺参り、墓参り。老若の善男善女が手を合わせ、心を寄せて、仏心を深くする。

彼岸会を燃えて居るなり大香炉 原石鼎

ゆつくりと山懷の彼岸鐘 阿波野青畝

石鼎は、大寺の大香炉の大香煙に彼岸詣の庶民のはかりしれない祈りと願いを見て取った。青畝は、山寺の梵鐘の響きの中に慈悲の救いを聞き取った。

お彼岸の鐘が渡るよ水の上 林原来井

この句を読んで、此岸から彼岸へ向けて渡って行く彼岸鐘の音色のありがたさを感じるのは、ひとり私だけであらうか。

彼岸晴といふ好日に恵まれし 藤井巨水

牡丹餅の昼夜を分つ彼岸かな 正岡子規

まさに彼岸晴れの好日である。その春分のお中日、子規には牡丹餅のおいしさがうれしいのである。

いうまでもなく春分の日は、昼夜二分、太陽は真東から昇り、真西に沈む。西方十萬億仏土の阿弥陀如来の極楽浄土、つまり彼岸の極楽世界を觀ずるのは、太陽が真西に沈む中日の夕日を拝することがもつともふさわしいとされる。

山の端に宝珠のまるき彼岸かな 阿波野青畝

入り日拝む目も衰へし彼岸かな 鈴木燕郎

竹の芽も茜さしたる彼岸かな 芥川龍之介

人界のともしび赤き彼岸かな 相場遷子

中日の赤い夕日を、阿弥陀如来の円光の大宝珠と受けとめて、青畝を仰いだ。目の衰えた燕郎にも、如来の大慈大悲の光明は光り輝いていたことであろう。そんな夕光を受けた小さな竹の芽を、芥川龍之介はいとおしく感じたのである。そして遷子の一句は、そうした彼岸の入り日が沈んでしまった後の此岸の人界の夜の灯火を、これまたいとおしく、「赤き」と感じたのである。

一竿の老いの物干す彼岸明け 松本つや女

月日過ぎただ何となく彼岸過ぎ 富安風生

兄弟の相睦みけり彼岸過 石田波郷

これまた、いきなりにとりう感じであるが、紙幅の都合もあつて最後に彼岸明け・彼岸過ぎで結びたい。つや女は、彼岸明けの晴れたその日、ささやかな洗い物を干した。風生は、なんととはなしに彼岸過ぎを迎えたという。そして波郷は、今は亡き父母の墓参りを終えた兄弟が仲むつまじくある彼岸過ぎの頃合いを、一句に捉えたのである。

もとより、お彼岸への思いや願いは人それぞれである。思いつくままに取り上げたこうした秀句の中に、春のお彼岸にまつわる日本人のゆかしい心が点描されている。

懐しき玩具

芝崎慶三

ドングリの実などを回して遊んだ自然玩具から工夫を加えて発達した玩具に独楽がある。

起源は相当古く「日本書紀」雄略天皇紀に記述がある。また中国から高麗を経て渡来したために「こま」と呼んだという説もある。

心棒または軸を中心に円形の胴が回転する玩具の総称。

木、竹、貝殻、金属、ガラス製など形状もさまざまで種類が多い。

唐独楽、博多独楽、貝独楽、八方独楽、お花独楽、銭独楽、鉄胴独楽、叩き独楽さらにその変形の手車、輪鼓などが教えられる。

曲独楽としての見世物興行にも人気があり、また賭け事に使われた独楽も多く、子供だけでなく大人も遊べる玩具であった。

誌面さらに充実！個性溢れる仏教総合誌

the 法然

Vol.3

2000年春号

生き方情報満載

定価1000円(税込)

書店で注文なさるか
下記へ直接お申し込み下さい。

発行

(財)浄土宗報恩明照会

港区芝公園4-7-4

TEL:03-3436-3353

お寺に泊まろう

■全国の泊まれるお寺■宿坊ガイド■体験記

◆豪華カラーグラビア

法然の道へ ●撮影=樋口英夫

〈誕生寺／比叡山／美しき霊場の風景〉

世紀末の点景 東京1900年

松山 巖 写真=鬼海弘雄

子供と遊ぶ

陶芸家和田万里子の世界

◆インタビュー

俳人 金子兜太

遊び心で自在に人間をうたう

木彫家 関頑亭

仏を通して人間を知る

参議院議員 奥村展三

浄土宗との縁

企業家 前島智征

父の死 父の葬儀

小さなお経

対談 法然という衝撃

阿満利磨×寺内大吉

江戸のピカレスク色悪 (いろあく)

古井戸秀夫

[平家物語新聞]第貳号

コラム特集 二〇世紀の宝石

発売

(株)西田書店

千代田区神田神保町2-34山本ビル

TEL:03-3261-4509

【書きおろし連載小説】

石丸晶子

法然上人を
めぐる人々

式子内親王の生涯
(第二部)

第三回 残された人々

七

「何とまあ」

「兄も弟もあつたもんやないな」

「で、備中守様は一ノ谷にいったんか」

網元をとりまく人々のあいだから声があがつた。

「兄君の命令や。弟としてはいかなあかんやないか」

網元はするどい視線で彼のまわりに集まつた人々をさっと見まわすと、

「山の手が破れたちゆう備中守様の報告をうけて、内大臣（宗盛）様はえれえおどろいたそうや。そんでな、山の手に御一門の誰かを向かわせなあかんいうて、方々に声をかけた。六日の昼やつたそうや」

「で、誰が行つたんか、山の手に」
人々が訊ねた

網元はじろりと彼らを見まわすと、
「都の暮らしに慣れてしもうた方々やないか。」

恐ろしがつてな。尻ごみして誰も引きうけなんだそうや」

三草山にはじまつた源平合戦の次第は、何万ともしれぬ平家の落ち武者たちの口をとおして、西国筋の住人で、知らぬ者としてないうわきになっていたのである。

「山の手は重要なところでございますから、私など、とてもその柄ではありません。どなたか他に適当な方を。そういうてな、方々はみな内大臣の依頼をこたわつたそうや」

「何とまあ」

「そんなら、平家は山の手を守りをせんかつたんか」

「はじめから負けとるやないか、そないなことで」

人々が口々に言いはじめるのを、

「まあ、聞けつて」

と網元は両手で制すると、

「困つた内大臣は再三にわたつて能登守（教経）様に使いを出されてな。そんでやむのう

能登守が一万余の武者をつれて、山の手に行ったそうや」

そこまで言ったとき、行列ぞいに群がつている見物衆のあいだから、どよめきがおこった。

彼をとりかこむ人々がふりむくと、あたりの異臭にすいよせられてやって来たのか、野犬が数匹、平氣の首をかかげた源氏の武者にまといつき、吠えたてている。

綱元は顔を歪め、しばし凄惨なその光景を見つめていたが、やがて我にかえったように「無残や、無残や」と低くつぶやき、

「能登守がむこうた山の手ちゆうのは、一ノ谷の奥でな。うしろは五十丈もあるかのう、鉄拐ヶ峰てつくわがみねいう断崖絶壁よ。平家もまさかその断崖絶壁を、源氏の搦め手はなめてが駆け降りてくるとは思わなんだやろ」

「・・・」

しんとして聞きいる人々に、綱元は嘆息し

ていった。

「さすが能登殿は、甲冑かこうに身をかためていたいう話やが、能登殿の兄君の三位殿（通盛）なんどは、明日は合戦になるやろいうのに、山の手に女房までつれていつてな。山の手の陣中で女と臥せっておったそうな」

八

人々があきれて、顔を左右にふりながらため息をついていると、

「わては商人あきんどや。合戦やいうて家にじっとしとつたら、おまんまが食べへんがな」

商人が輪になった人々の反応をうかがうようにして口をはさんだ。

「丹波で仕入れた米も大豆も、三草山であらかた駄目にしてしもうたしな。元手を取り返さなあかんがな」

「ほんまやなあ」

人々の注意が商人にあつまって、

「で、どうやったんや。どうやって元手をと

り返したんや」

目の前の行列よりも、にわかになが身の現実にはひき戻された男たちが、物欲にぎらつく目で商人に訊ねた。

「合戦のあとというもんは、金目のものが仰山落ちちよるんや。源氏に追われて三草山を平家が逃げだしたあとを、わては落とし物を拾いあるいて三木に出て、いったん明石の家に帰ってな」

「おお、相当の拾い物があつたかの」

「まあ、聞けつて」

商人はそういつてにやりとすると、

「わては何も盗人したんとは違うで。平家が落としていったもんを拾うただけや。して、何を拾うと思う」

彼はさつと人々を眺めまわした。

「合戦場のあとで、金目になるいうもんは、戦死したお侍たちの甲冑が、あるじを失うた馬いうもんが決まりやないか。そりや、血に染んだ甲冑も、刀も槍も、馬も、あつたわさ。

そやけど、武器だけやなかったで」

「ほう、何があつたかの」

好奇心をそそられた人々の目が、いつせいに商人に集まった。

商人は得意げに、

「わては明石から須磨、生田の森、ときのうまで歩きまわつとつたんや。おかげでくたいたやがな」

「氣イ持たせんと、早う言えつて」

「それがな、琵琶に笛いう楽器やろ。公家衆の着る狩衣から、女房が着る桂まで、桐箱に入つたまんま、そここに落ちとつたわ。それがみんな金目のものでよう」

「やけど、商人とは罪なものよのう。お前さまはそれでひと儲けしなかつたか」

羨望のまなざしが商人に注がれるなかで、誰かが声をあげた。

「落ちとるもんを拾わなかったら、土になるだけやないか。琵琶も笛も、わてら商人に拾われて、都の公家衆につこうてもらうのが、

楽器の本望いうもんやないか。それにわてらは、何も拾い歩いただけやないで。供養もして歩いたんや」

「——どういふことや」

声をあげた同じ男が訊ねた。

「お前さまは知るまいが」

と商人は、

「金目のもんが、何もただの街道すじに置いてあるのとは違うで。あたりは戦場跡や。首のねえ胴体や、お侍たちの片腕、片足が切り落とされて散らばつとる。あたりは血だらけや。そこに琵琶だ、苗だ、木箱だ、いうんが落ちとるんや」

商人はことばを切ると、

「死にきれんで道ばたに倒れとるお侍たちの口から、なむあみだぶつのお念仏がもれとるがな。なむあみだぶつという名号をかけた紙もな、あつちやつちやに散らばつとる。わてらはそこをな、お念仏となえながら歩きまわったんや」

九

「戦場にまで楽器を持っていったとは、平家もあわれよのう」

「楽器だけやないで。合戦場に女房までつれていったつうのは、むちゃくちややがな」

人々が口々にいいはじめたとき、

「さっきの備中守様のことやが」

と誰かが訊ねた。

「やはり一ノ谷で討死されたかのう。まだ御年十七とか聞いたるが」

「おお、そのことよ」

高砂の綱元だという男が答えた。

「わしはこの目で見てきたがな。備中守様は内大臣に報せにいったあと、海にしりぞかれてな。海べりに小船を浮かべて合戦のゆくえをみておられたんや。わしがその小船を御用立てしたわい」

彼の話によると――。

六日早曉の三草山、七日早曉からの一ノ谷、生田の森、とすべての戦いに敗北した平家の落ち武者たちで、西国では海も陸も大混乱であつたという。

「海には平家の船が幾十となく浮かんでおつたがのう。わしが見たのはまっこと修羅地獄やつた」

綱元はつづけて、

「何万人となく落ちてくる武者たちを、船が幾十浮かんでおつても、収容しきれるものではないがな、そんでな、命からがら船めざして逃げてくる味方の侍たちを、先に船に乗つたお侍たちが、太刀、長刀で薙ぎ払うとる。

源氏には切り殺されんですんだお侍が、味方の刀で腕を切り落とされての。あのわめき声が耳にのこつとるわ」

彼は顔をゆがめ、声をふるわせた。

「七日の昼、備中守様も海から陸のようすをみておつたんや。平家が敗れた、とみておら

れた。とそこへ一人の落ち武者が源氏に追われてがばと海中に入つてな」

そこまでいうと、綱元はふたたび顔をゆがめ、嘆息して、

「備中守様のお船にむかつて、乗せてくだされ、と叫んだんや」

小船にはすでに、目いっぱい武者たちが乗船していた。

しかしあと一人、乗船できぬということもない。

「乗せてやれ」

と十七歳の若者は命じた。

小船は岸にむかつて漕ぎだし、馬に乗った落ち武者は、それにむかつて必死に馬を泳がせた。

と小船にたどりついた落ち武者は――。

「生きるか死ぬかの瀬戸際やがな。馬ごと海に入つたお侍もよっぽどあわててたんやろ。

馬に乗ったままがばとばかりに小船に乗りうとした」

人々のあいだから、ため息がもれた。

「小船はそのまま転覆してしもうたわい。みんな海に投げだされてな。あつぶあつぶしとつたところに、備中守様は源氏に討ちとられてしまわれたのよ」

「——何とまあ、哀れな」

「ほとけごろを持つたばかりになあ」

「屋島にさっさと自分らだけで往んでしもうた兄君たちに、殺されたようなもんや」

昂ぶった声で人々がいいはじめたとき、

「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

綱元をとりかこんだ人々のあいだから、誰がとなえはじめたともなく、念仏の声がひろがっていった。

(つづく)

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝——面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』（人文書院）『お手紙から見る法然さま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日記』（朝日新聞社）など多数。

仏教興隆の礎、聖徳太子の遺徳を偲んで、精霊会という儀式が行われます。

斑鳩の法隆寺。大阪の四天王寺など太子に縁の深いお寺の行事です。

「かいよせ」という美しい響きをもった春の季語があります。

「貝寄風」と書くのですが、四天王寺の精霊会の前夜、浄土のある西方からの風をこう呼ぶのです。

貝寄する風の手じなや若の浦

芭蕉

この風によって貝が浜に寄せられてくると考えていたようです。その貝殻を四天王寺の石舞台の四方につける風習があったということなのです。

貝寄風に乗りて帰郷の船迅し

中村草田男

結構強い風なのです。この早春の風と帰郷の船。なんともいえない味わいのある句です。

貝寄風

筆名一光

貝寄風や愚かな貝も寄せてくる

松瀬青々

こちらは人を食ったような句です。諧謔味があつて面白い。

貝寄風や浪速に多きめし暖簾

浜 明史

貝寄風の本場、大阪を見事に読んだ句です。「めし」と白く野太く染められた暖簾。風は記憶をも運んでくるのです。

古き伝統技

三代にわたる信頼

限社
有会

浄土宗法衣専門
古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421128 9
振替0018012145231

御法語に聴く

源空は、させる因縁もなくして法爾法然と道心をおこすがゆえに、師匠、名をさずけて源空となづけ給いしなり。

私は、それほどの理由もないまま、文字通り「法爾法然（あるがままに、自然に）」のごとく仏道を志したので、お師匠さま（瓢空上人）は「法然」という名を授けてくださったのです。

法爾法然として

「ほうねん」という音としては誰の耳にも馴染み深いが、さてその意味はとなると案外難しいかもしれない。この法語は「法然」の名前の由来を伝えたものとしてあまりにも有名である。

父が夜襲を受けた時、勢至丸（法然上人の幼名）は九歳。これ以上の衛撃はないと思われる出来事である。そこに「仇をうつな、出家せよ」との父の遺言である。幼いとはいえ武士魂を宿した勢至丸にとってこれは意外であつたに違いない。衛撃が二度走つたのである。勢至丸はその遺言どおりに仏道を志したと、伝記は教えている。「おや？」と思う向きもあろう。十二分な「させる因縁」はあつたではないか。伝記のいうことと違つてゐるではないか。

「法爾道理」。「瑜伽師地論」に見られるこの言葉は、法が天然、自然の道理になつてゐるという意味ではあるが、法然上人もこれを用い「法爾の道理という事あり。ほのおはそらにのぼり、水はくだりさまにながる……ただ一向に念仏だにも申せば、仏の来迎は法爾の道理にてうたがいなし（つねに仰せられける御詞）」と、阿弥陀仏の

救済は炎が空に向かつて燃え盛るように、水が高きより低きへ流れるように、それこそ天然、自然の摂理であり、余計な思慮を狭む隙間のないものである、と説いている。

「法然」の名もまさにこの「法爾道理」のごとく、「あるがまま」に発せられた道心を勢至丸の全身に見て取った当時の師匠叡空上人が、勢至丸十八歳の時に授けたというのである。

いったい、何かを志す場合、外的な要因が大きく作用することは否めない。しかし、それだけがその志を確固たるものにする十分条件かといえはそうともいえない。内に（ともすると自分でも気づかないでいた）「想い」の存することが必要条件となるはずである。これはたとえ「誰かのため」に発した、正義感にあふれ利他的で高尚な志であったとしてもいえるであろう。「（自分以外の）誰かのため」との使命感だけではなかなか貫けないものである。その利他の思いはそのまま自分自身のためになるという信（自己欲に基づく打算的な信ではないことはいうまでもない）がなければ難しい。

父の死、その遺言、母への思い……。たしかにこうしたことは大きな、決定的な「させる因縁」であった。しかし十分条件ではなかった。

法然上人自身に「自然に」道心がそなわっていたからこそ、その志は遂に貫徹されたのであり、幼い頃の不幸な出来事はその道心を啓発する必要条件だったということになるのではないだろうか。

このことは「凡夫のためにその救われる道を明らかにする、しかしそれはそのまま自分が救われる道にはかならない、誰よりもこの愚かな凡夫法然自身が救わなければならない……」とした求道修学の姿勢、人間観にも、はつきりと顕われているとは言えないだろうか。外的要件と内なる道心とは、実は強固な鎖でつながれ一つの円環となっていたのである。

なにも、法然上人の凡夫救済に対する使命感、平等往生を目ざした信念を否定するのではない。「させる因縁もなくして」とさりとら言うてのける大胆さに、法然上人の凄さと使命感、信念の強靱さをあらためて感じただけである。

(小村 正孝)

連載

雑誌『浄土』を支えた人々

列伝

仏教ルネッサンス再び。珠玉の一冊『念佛讀本』執筆者たちの足跡

椎尾辨匡上人

(一八七六～一九七二)

真野龍海

上人は名古屋市の真宗高田派円福寺椎尾順位師の五男として生まれた。父は漢学の泰斗、母には十三才までに浄土三部經を習わされたという。このような生い立ちに深く後々の活動に影響を与えたことであろう。

東京帝国大学の卒業では恩賜銀時計を受け、仏教学の基礎的研究を次々と深めていかれた。

大正四年、文学博士。宗教（現大正）大学教授、早稲田大学講師、日本大学教授、大正大学では第六代、第九代、第十四代学長と三期も興望を受けて歴任された。

上人の学問への態度は、先ず、仏教の基本的な心とは何か、という事を明らかにして、次に、次第に一般社会の人々に、分かりやすく、それを伝える事に専念して行かれたのであります。その基本的な仏教の姿勢を明らかにするために、インドの原典によって、忠実に正確に研究されました。そのために初期の

仏教の經典や、注釈書等の精密な研究をされました。続く大乘仏教の《般若經》等の研究をされ『仏教經典概説』は、その学究の指南書となっています。さらに浄土教の浄土三部經の国訳等に及び、廣い仏教学の土台の上に、浄土宗の信仰の普遍化と仏教の社会教化に進んで行かれ尊い足跡を残されています。

学問的なこともさることながら、国会議員として三期にわたって活躍し、社会教化運動に率先し活動された。特にその「共生運動」は、現代社会においての仏教の近代的理解と実践でありました。今になって、世を挙げて共生、共に生きる、等々言うけれども、先生は大正十一（一九二二）年第一回の「共生結集」に「共生」の呱呱の声を挙げられたのです。この言葉は、例えば今はワープロで「きようせい」と入力すれば、「共生」の文字が出ますが、そのように共生の言葉が一般化した



昭和30年頃の博士（『椎尾辨匡選集』第三巻より）

のは最近の事なのです。この言葉は、仏教にとっても縁起の近代的表現であるとともに、近代文明の、自然や、動物は人間のためにある、という傲慢な態度を、根本的に見直させるすばらしい表現です。

共生という言葉は、詳しくいうと、単なる共に生きるという昨今の世間で言われている意味ではなく、仏教と浄土宗の教えとを総合したいまだなかったすばらしい言葉で、次のように図示できます。

（仏教の見方）

縁起

（すべて相関関係で、生じる）

共生

（浄土宗の信仰）

願共諸衆生

往生安楽国

（願わくば諸の衆生と共に安楽国（浄土）に往生しよう）

次の上人のお歌も分かりやすく仏教・浄土

宗の南無阿弥陀仏（無量寿）仏の心を表しています。

時は今ところあしもとその事に

うちこむいのちとわ（永久）のみのち

まだ、上人は風習となっている中陰という

ことは臨終一念即往生の浄土宗にはないと注

意せられました。其の通り、俗説の中陰は不

可で、七日々に追善の念を捧げる期間と考え

るべきでしょう。

大正大学では、その大学の難期を越えた功

労と高徳を讃えて先生のブロンズ像が建てら

れています。私は毎年学生にその説明と共生

の教えを略説しました。その九代学長時代に私は在学し、卒論の指導も受けることができ有り難い事でした。講義はノートも持たずに、いきなりパーリ語等の原語も交えて、立て板に水の如くでありました。時は戦争中でありましたが、先生は学生のマラソンの先頭に立って疾駆され、皆を驚かせました。御臨終は木魚を腹に叩きお念仏の中の御往生でした。御著書は『椎尾辨匡選集』十卷等に収められ、上人について藤井実應『椎尾辨匡先生の片影』（奈倉道隆先生から拝借）が簡潔に伝えています。（浄土宗教学院理事長）

仏教ルネッサンス、再び
珠玉の（冊此処に復刻成る）

完全復刻『浄土』昭和十一年十一月號持輯

執筆者一覽

念佛讀本

石眞大佐中椎
井野野藤村尾
教正法賢辨辨
道順道順康匡

稲小佐江島笹
垣西藤藤野本
眞存春激慎戒
我祐夫英祥浄

中松梅矢井
野浦原吹川
善眞慶定
英一隆輝慶
(目次見当)

念仏者必携の書！【特別頒価二千円—送料込み—】

■申し込み・問い合わせ■
法然上人顕仰会
〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明徳会館内
電話：03-3578-0947/FAX：03-3578-7036

ポケット版

枕経通夜葬儀諸経偈文集

諸経偈集

こんな経本が
ほしかった

能化必携！

21世紀の経本遂に刊行！

プロが創った

プロフェッショナルのための経本。

緊急、不意の枕経に、お通夜に
能化のお通夜、葬儀のお焼香に

これさえあれば

出先からそのまま回れる。

3つのポイント

◇ポケット版という大きさ！

タテ15センチ、ヨコ8センチ、

厚さ1センチ

◇通夜、葬儀に必要な経文を、

最小限にすべて網羅！

◇経典は、すべて本字にて表記！

内容

廣懺悔

懺悔偈

初夜禮讃偈

佛説無量壽經數佛頌

佛説無量壽經四普偈

佛説觀無量壽經真身觀文

回向文

佛説阿彌陀經

一枚起請文

一紙小消息

發願文

臨導師作法

廣懺悔訓誡

定価：2,000円(税込)

送料	1冊	180円
	2冊	210円
	3～5冊	310円
	6～8冊	340円
	9～11冊	380円



◀お申し込み先▶

ふじゅせん刊行会

〒141-0021 東京都品川区上大崎1-9-11 (戒法寺内)

TEL: 03-3441-8971 FAX: 03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●賀状

〈特選〉書き終えて輪ゴムはちりと賀状かな 根岸 哲

●一枚ずつ楽しみながら仕上げていく人、重荷を負うように何とか片付けようとする人、それぞれに歳事の一仕事である。書き終えて輪ゴムで留めた時の思いも、右に従ってそれぞれなのだ。さて作者はどちらなのだろう。

〈佳作〉年賀状函に封じて日暮れなり

長谷川 裕

小躍りに賀状を飾る五歳かな

近藤 啞々砂

皺の手でまわし読みする賀状かな

加藤 政男

●福寿草

〈特選〉福寿草盆栽ならび築五年

近藤 魚夢

●いくつかの盆栽を並べ、その中にか庭のどこかに、福寿草の黄色い花を咲かせているのである。建築して五年といえ、もうその家

選者=増田河郎子

にも住み慣れたのだろう。幸せな家庭の様子を、句の裏に見えているようだ。

〔佳作〕退院の近き窓辺に福寿草

細田初枝

盆栽の石に寄りそう福寿草

大村和代

固まりて競う小鉢の福寿草

浜口佳春

●自由題

〔特選〕

軽々と島を浮かべて冬の池

雪我狂流

●池の面はどんよりとした空を映して、鉛のように沈んでいる。これが春先までの安住の場である。浮き寝をむさぼるもの、思い出したように羽ばたくものたちを、このように表現したのは面白い。

〔佳作〕蠟梅や塀のかたえの立ち話

山本美代

表札は在りし日のまま年迎う

山口信子

石蹴ってその音追えり枯野道

池田伊吹

賀状

一言の幸をこどける賀状かな
違和感とも白紙賀状の鮮烈に
ひととせの無沙汰を詫びて賀状来る
ほのぼのとおとなりから絵葉書の賀状来る
名無しの賀状今年もまじりてもったいなや
逢ふ日なく筆勢変らぬ賀状来る
百才の眼元潤ます賀状かな
心経の一字字美しき賀状かな
年賀状先づは寿ぐ一句かな
龍の尾の年賀状よりはみ出しぬ
小躍りに賀状を飾る五歳かな
「会いたいね」と言葉ばかりの賀状かな
あれもこれも友だち賀状書きそびれ

上野明達
松田光誉
中島一子
山本美代子
山本美代子
細田初枝
河合富美枝
河合富美枝
河合富美枝
雪我狂流
近藤啞々砂
白金潤
秋谷菊野

賀状束ねてウインナワルツ終了
回想なし宣言なし賀状あり
配達夫どつさと置きし賀状束
トラウマも賀状もなにも鯛のあん
福寿草

井口葉
笠井亜子
山口信子
植田規夫

玄関に來客を迎ふ福寿草
羊水はやさしき宇宙ふ福寿草
両親を囲む一族福寿草
白壁の光に揺るる福寿草
ひたすらに凍ど生きたし福寿草
寄せ植えの苔でくるみし福寿草
白砂をこぼして植えぬ福寿草
日本髪匂える部屋に福寿草

上野明達
山本美代子
細田初枝
河合富美枝
河合富美枝
井村善也
増田信子
石原 新

自由題

竹林に竹伐る音や寒の入り
マンションに毛布干されし片田舎
カレー煮る寒き子等待つ母の背な
水仙の香に癒されて地震の島
初御空山河を抱き最上川
大黒忌七草がゆの湯気の中
鯛焼きや人あざむくを忘れたり
梟の剝製ならばまたたかず
大寒の洗濯物がビルつなぐ
末枯や苔のごとき無人駅
冬日和バスより降ろす車椅子
風花や出船ゆつくり向きを変え

河合富美枝
細田初枝
山本美代子
中島一子
松田光誉
上野明達
秋谷菊野
長谷川裕
笠井亜子
島谷ときを
堤ふみ子
野村多加子

第十三回
浄土誌上旬会の
お知らせ

季節

朧

目刺し

自由題

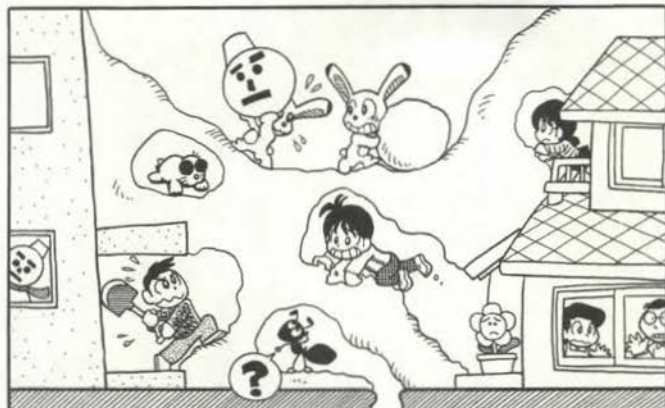
締切・三月十五日
発表・『浄土』月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各一名・佳作各三名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

まちがいさがし

出題・藤井ひろし



『合併号、積雪だつて2ヶ月分』
まちがいは7ヶ所。答えは17ページ。

編集後記

山眠る小枝の先の世紀末

代潤

あれ、『浄土』が来ない。首を長く待たれた方も多いと思います。大変申し訳ありませんでした。深くおわび申し上げます。

突然の合併号、そしてこの薄さ。月刊『浄土』はこの先4月からどうなってしまうのだろう。そんな不安にかられる方もいらっしゃると思いますが、大丈夫です。『浄土』は今年で六十六年目になります。月刊誌でこんなに長く続いている雑誌は、日本では他に教える程しかありません。それほど『浄土』には歴史があり、伝統があり、先達の手が込められているのです。そう簡単

につぶすことなどできません。

ただ確かに厳しい状況にあります。しかし今こそ法然上人を讃仰する気持ちを強く持ち続けることが、この『浄土』誌を作る全てだと考えています。世紀末の今、世の中全体が何かおかしくなっています。コンピュータがすべて解決し、何でも欲しいものを満たしてくれるという幻想を持ち、目の前の人間関係を希薄にしています。活字離れは深刻なものとなり、本屋が様変わりを続けています。しかしそんな現代だからこそ、法然上人の教えは光を持ち、雑誌『浄土』は必要だと思っております。これからもご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤
斎藤晃道
村田洋一
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土 六十六巻二・三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成十二年二月二十日
発行——平成十二年三月一日

発行人——真野龍海
編集人——宮林昭彦
印刷所——株式会社シータイイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人讃仰会
電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六
振替〇〇一八〇一八八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷害注意



民衆近し、静かに



足元注意



踏切あり



出口



落 物

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわらな



われ物注意



安全第一



歩行注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

『浄土』特選頒布会

ご注文・お問い合わせは法然
上人顕仰会まで。

【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、
仏さまの御加護を

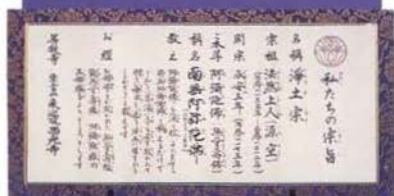
水晶 数珠

水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
- 水晶数珠
プレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。

水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額
家庭の仏壇にぴったりの布教額です

大(320×183ミリ)

1,260円(送料別)

小(273×142ミリ)

480円(送料別)

平成11年6月より頒布価格が変わりました

選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465ミリ)
20,000円(税・送料別)解説書入り
(お届まで4週間かかります)

